

松下幸之助記念志財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】

堀越耀介

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院教育学研究科博士後期課程

【研究題目】

米国ハワイ州における多文化共生・多様性尊重・相互理解のための「子どものための哲学 (P4C)」にかんする研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究の目的は、「子どものための哲学 (Philosophy for Children:以下 P4C と略記)」と呼ばれる哲学的な対話にもとづく教育実践が、米国ハワイ州において、子どもたちの間でいかにして多文化共生、多様性の尊重、相互理解を促進しうるかを理論・実践的に明らかにすること、そして、こうした実践を本邦でどのように展開することができるかを検討することにある。

第一に、日系、中国系、先住ハワイ人系、白人系といった様々な背景を持つ人々からなるハワイ州という特殊な環境下での、他者理解や政治的な合意、様々な概念の意味を協働で探究する哲学的対話は、それ自体「国際理解・協調」のための教育であり、これについて調査することが第一の目的である。

第二に、ハワイの人々は周囲を大海に囲まれ、豊かな森林に抱かれた土地の恩恵を受けていると同時に、火山噴火や海難事故といった自然災害・自然への畏怖といった感覚とも不可分な生活を送る。そのため彼らは「自然と人為」という古典的な哲学的問題とも対峙しているといえ、実際、「自然と人間との共生」を考えさせる P4C の教育実践も数多く行われており、これについて調査することが第二の目的である。

【研究の内容・方法】(800字程度)

申請者は、上記の目的を達成するため、ハワイ大学マノア校の附属機関である Uehiro Academy for Philosophy and Ethics in Education に6か月間滞在し、理論・実践両面から研究を遂行した。

まず、理論面では、現地の受け入れ代表者である Dr. Benjamin Lukey, Dr. Amber Makaiau 両氏のほか、「P4C ハワイ」の創始者であり、アカデミーセンター長でもある Dr. Thomas Jackson 氏との研究会を通し、P4C 関連書の批判的検討や研究指導を受けた。申請者は特に、P4C とシティズンシップ教育にかんする研究発表や論文指導を通じて、それらにかんする見解を深めることができた。

とりわけ P4C の空間において「知的安全性 (intellectual safety)」を確保し、「急がない(not-in-a-rush)」という理念の内実や実現性を探るため、子どもたちが何を言ってもよい場はどのようにして可能となるのか、対話の場における「平等」はいかにして確保されるのかについて、日々議論することができた。

次に、実践面では、P4C の授業実践が行われる「モデル・スクール」への定期的な来訪を通じて、実践観察を行った。具体的には、Kailua High School, Waimanalo Elementary and Intermediate, Waikiki Elementary School, Hanahau`oli Elementary School での実践観察を行ったことが挙げられる。

とりわけ、カイルア高校では、多文化共生・多様性尊重・相互理解を深めるための哲学的対話が行われる「エスニック・スタディーズ」の授業を見学した。異なる人種や文化間で、どのようにお互いを理解すべきなのか、そして、私たちがどのようなバイアスをもって他者と接しているのかを意識する対話が行われた。

次に、「自然と人間の共生」という点では、環境問題や持続可能な社会について考える、英語や日本文化のクラスを見学した。人間が環境を犠牲にしなげれば生きられないとして、それはそもそも正しいといえるのだろうかといったテーマで哲学対話が行われた。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究の目的は、ハワイ州における P4C の実践を、国際理解・多文化共生、人間と自然の共生という観点から考察し、「シティズンシップ教育」として本邦での導入可能性を探ることにあつた。本報告では、紙幅の都合により、この本邦での導入可能性にかんする考察をもって、本研究の結論に代えることとする。

まず、全体的な印象として、いずれの P4C モデル・スクールにおいても数年から数十年という時間をかけて、学校に p4c の基盤や文化を形成し、学校全体でそれに取り組んでいる。そこでは、本邦ではほとんど見られない「校内哲学者（Philosopher in Residence）」がおり、本邦においても、こうした役割の長期的な協力が不可欠であることが分かった。

また、「P4C ハワイ」では、議論自体が哲学的になるかどうかよりも、コミュニティ作りや対話の環境面に主眼が置かれている。探究のための環境や雰囲気がいしっかりと確保されているかどうか、この点が何よりも優先的に査定され、教師は常にそのための細心の注意を払っている。本邦での導入に際しては、以上の２点が極めて重要になってくるといえるだろう。